

原発40年超運転

「中間貯蔵切り離し議論

知事、方針を軌道修正

杉本達治知事は二十六日の県議会本会議の一般質問で、運転開始から四十年を超える関西電力の原発三基の再稼働について、原発の使用済み核燃料の中間貯蔵施設の県外立地を巡る問題と「切り離して検討したい」と答弁し、議会側にも同様の対応を求めた。杉本知事が議論を切り分ける考えを説明したのは初めてで、議会側との認識の差が埋まらぬ中で軌道修正を図った形だ。



県議会本会議の一般質問で答弁する杉本知事。26日、県議会議事堂で。

(今井智文)

この日は、田中宏典議員(県会自民党)と野田哲生議員(民主・みらい)が、原発再稼働を巡る知事の姿勢について質問。杉本知事は「中間貯蔵の問題については、引き続き関電や国の取り組みを確認し促す」と方針を説明した上で、「当面する四十年超運転の課題については、この問題とは切り離したい」と述べた。

杉本知事は本会議後の取材に「特に方針を変えたことではない」と強調。「中間貯蔵が前提だ」という話と、四十年超運転の議論は「ごちゃごちゃになっていった。これから県議会で四十年超の議論がスムーズに進むよう期待している」と述べた。

杉本知事は昨年十月以降、関電が中間貯蔵施設の計画地点を示すことが四十年超運転の議論に入る前提だと明言。しかし、関電が計画地点の確定を二〇二三年に事実上先送りしたにもかかわらず、一転して議論の開始を受け入れたことに

ついて、議会側から「唐突だ」と疑問の声が出ていた。関電は、青森県むつ市の

中間貯蔵施設を共用する案を福井県に示している。これに対し、むつ市の宮下宗一郎市長は二十六日の記者

会見で「むつ市民や青森県民の民意を踏みにじっている」と改めて厳しく批判。反発を強めている。

まずは使用済み核燃料の中間貯蔵施設の計画地点を確定し、その上で関西電力の原発の四十年超運転の是非を考える。再稼働への議論をこうした流れとして受け止めていた県議会各会派からは、杉本達治知事が二つの問題を一切

会派内からは、四十年超運転の議論を求める声も上がるが「知事の真意を確認する」と話し、今後の予算決算特別委員会などの議論も踏まえ、会派の方向性を見定めていくとした。

出せない」と感じている。第二会派「民主・みらい」の辻一憲副会長は「正直驚いている。説明が変わったように納得できない」と述べた。「常任委員会でも議論が進むのかを見て、会派でも議論していく」と動向をうかがった。

県議会各会派 広がる戸惑い

最大会派

「県会自民党」の山岸猛夫会長は「自分でひつつけておいて、知らない間に切り離したと困惑。杉本知事の過去の発言は、二つの問題を一体化している」と解釈できるとして「知事はハードルを上げたなどと心配していたくらいだ」と首をひねった。

は、杉本知事の発言意図を「地元二町(高浜町、美浜町)がそろって再稼働に同意する中で、知事も市で、理解が深まっている」と推測する。ただ、四十年超の議論を前に進めないと「思っている」と指摘する。ただ、四十年超運転の議論は県議会ですべて深まっていなくて「今定例会での結論は今井智文、尾崎隆宏」

との立場。関電が中間貯蔵施設の候補地の一つとして提示した青森県むつ市で、理解が深まっていることを踏まえ「確定の見通しがないの」議論を進めるのはおかしい」と指摘した。

浅井貴司、山本洋児、(浅井貴司、山本洋児、尾崎隆宏)